

「感情の社会学」の研究者として、情報障害を埋める全盲のソフトウェア開発者として

聴講翌日の朝、いつもの通り朝刊を広げ見出しを拾い読み始めていた時に、ふっと、石川先生は毎朝の新聞をどのように見ておられるのかなーと思いました。

私の机の横には、図書館から借りてきた江戸文化関係の書籍が山積みされています。斜め読みしながら必要な箇所を拾ってまとめているのですが、石川先生は本一冊を読まれるのに、大変な手続きを経てきた書物を読まれてこられたのでしょうか。

一冊の本を大事に読まれ、またくり返し読まれてこられたのかと想像します。拾い読み、斜め読みなどをもってのほかの行為なのかなーと感じました。

ソフトウェア開発者としてのお話は、ご自身のたどってこられた経験を、後進の方たちの明日へ繋げるために、「今日できないことを、明日できるようにしたい」との思いが、開発されてきた足跡に感じました。正直知らないことばかりでして、認識の貧しさに恥じ入るばかりです。

電子図書館を開発された話は、石川先生が本当に喜び、楽しんでおられるさまが感じられました。与えられた本で過ごされてきた青年時代。それだけ「読みたい本を読む自由」を謳歌され、望まれておられたことの実現に喜びがあふれておりました。

そして「読みたい本を読む自由」にを、より近づくために取り組んでおられる「共同型自炊型電子図書館」の成功を祈らずにはおられません。「自炊」という言葉は、石川先生の様々な思いが載せてある言葉と感じ入っております。

最後の5分に初めて「感情の社会学」を話されました。正直、改めて身を持ち出して聞き入りました。できましたらもっともっと聞かせていただきたいと思った次第です。

私のボランティアの体験を話しますと、40歳半ばにあるきっかけで地域のボランティアセンターに登録しました。ボランティアの方々はある若い人が多い中で、一人中年のおじさんが入ったためか、最初に声をかけられた障害者のお祭りに、重度の障害者の付き添いが私の担当でした。

初めての経験、しかも車椅子で身体障害、言語障害がある方でした。汗をかきながら一生懸命に付き添いました。昼食時、お弁当の下に敷く滑り止めゴムシートがあることを知らず、弁当をすべらないように手で抑え続けておりました。

不自由な手では湯のみ茶碗では飲めなく、取っ手付きのカップが必要であること。様々な不手際があったはずですが、がしかし一言も文句どころか私のされるまま合わせておりました。夕方迎のバスが来て、そのバスに乗り込む時に、その方は車椅子から懸命に立ち上がり、私に向かってたどたどしい言葉で「ありがとう」と言ったのです。

その時に私は突然涙が溢れてきて「こちらこそありがとうございます。様々なことを教えていただきました」と咽びながら返しておりました。そして自身を見直し、心の底で気がつかないうちに障害者に対して「やってやる」との不遜な気持ちがあったのではないだろうか。

それからは一緒に同じ目線で楽しむことを心がけております。この体験が私のボランティアの原点としていつも心に留めております。

石川先生の最後の5分間に様々な思いを巡らしました。健常者と障害者に分けることの疑義。健康が正で病気が悪の善悪の疑義。心と身体、身口意、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）。

石川先生の活動に刺激され、私も障害のある人に対する意識の気づきに、少しでも役立ちたいと思いを新たにしました。